

21	西尾	西尾市立鶴城中学校	スズキ タカヒロ 氏名 鈴木 崇弘
分科会番号	2	分科会名	外国語教育

研究主題

話題に合わせて、英語で即興的な会話ができる生徒の育成～言語活動の実践を通して～

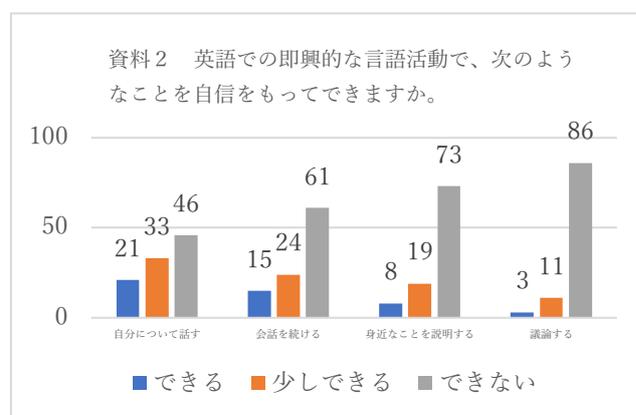
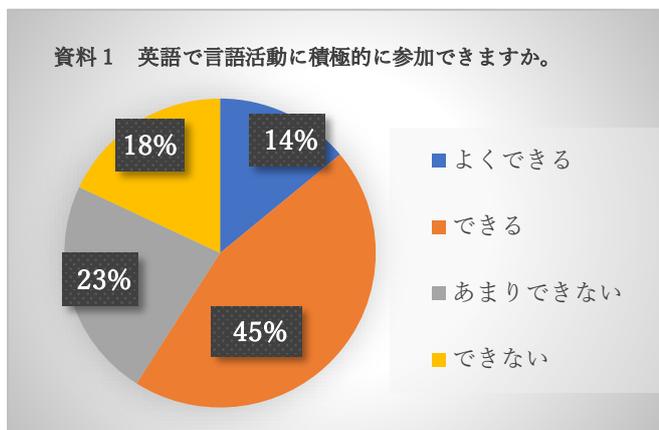
1 主題設定の理由

平成29年3月に現行の『学習指導要領』が告示され7年が経つ。学習指導要領の中に、「外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを整理したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成する」という目標が提言された。

さらに、導入（帯活動）の言語活動として、「Small Talk」が『中学校外国語：移行期間中における指導資料（小中接続・帯活動）』提唱され、内容の伝え合うことを重視し、話すこと〔やり取り〕の能力を少しずつ身に付けることを意図して行われるようになった。

令和時代の英語教育では、単元構想や本時の授業の中で「言語活動」をどのように設定し、英語の知識・技能、思考力・判断力・表現力をいかに伸ばしていくかが求められている。

昨年度1学期に、授業を担当する第二学年の生徒142名を対象に英語の言語活動に関するアンケート調査を行った（資料1、資料2）。



アンケート結果から、英語での言語活動に対する抵抗感は少ないものの、話題に合わせて会話を続けたり、身近なことを説明したり、議論したりすることに自信がもてていないことがわかる。授業中の生徒の活動の様子を見ると、教師が活動前に示した英語表現を活用して、第一声の質問と応答をしたり、自分のことを伝えようとしたりすることはできるが、一問一答形式で終わってしまっていることが多い。また、会話の中で挙げた話題について、追加で質問したり、説明しようとしたりする姿が少ない。このことから、生徒の英語科における思考力、判断力、表現力等の力を伸ばす必要性が明らかになった。

以上のような状況から、生徒たちが授業で習った英語表現を活用して、コミュニケーションを豊かに取れるようになってほしいと願い、研究主題を「話題に合わせて、英語で即興的な会話ができる生徒の育成～言語活動の実践を通して～」とし、授業での言語活動の充実を旨とし、研究を進めた。

2 研究の概要

(1) 目ざす生徒像

- ① 設定されたコミュニケーションの目的や場面、状況が理解できる生徒
- ② 目的に応じて、情報や意見を整理して、コミュニケーションの見通しを立てられる生徒
- ③ 言語活動での自らの学習を言語面・内容面で振り返り、次の言語活動に活かそうとする生徒

(2) 研究の仮説

- 仮説1 単元の導入で ALT を活用した課題設定をすれば、生徒が ALT と英語でコミュニケーションをとる目的や ALT の状況を踏まえ、言語活動の場面を理解できるだろう。
- 仮説2 ALT から示された課題設定に応じて、タブレット端末を活用して情報を整理し、自分が伝える内容を吟味して、必要な英単語や英語表現を考えたり、Small Talk の活動の中で新出表現を活用した会話モデルを練習し、会話の流れをつかんだりすることができれば、ALT とのコミュニケーションの流れを見通すことができるだろう。
- 仮説3 言語活動後に振り返りを書く時間を繰り返して設定すれば、自分が伝えたくても知らなかった英単語や即興的には考えられなかった英語表現を再考し、新出表現を活用して、言語活動で即興的な会話で活かせるようになるであろう。

(3) 各仮説に対する手だて

- ① 【仮説1に対する手だて1】
 - ア 単元の導入で日本に来て間もない ALT が日本のルールについて不思議に感じたことを話し、ALT の母国のフィリピンのルールをクイズ形式で比較することで、単元終末に日本のルールについてのクイズを作って ALT たちに伝える言語活動を設定する。(実践Ⅰ)
 - イ 今年度から本校に赴任した ALT に、今までに経験してきたことを担任との会話の中で紹介してもらい、お互いのことをより知り合えるように、パフォーマンステストの場で1分間英会話するという学習課題を設定する。(実践Ⅱ)
- ② 【仮説2に対する手だて2】
 - ア タブレット端末で海外のルールや日本のルールを調べ、比較した後に自分が伝えたい日本のルールをクイズ形式にし、適切な英語表現を考える活動を設定する。(実践Ⅰ)
 - イ Small Talk の活動の導入で新出表現を活用した会話モデルをペアで練習することで、話題を広げる質問の例や会話の流れをつかみ、フリートークの時間に自分で英会話を継続したり、既習表現を活用したりできるようにする。(実践Ⅱ)
- ③ 【仮説3に対する手だて3】
 - ア 言語活動の中で、自分が伝えたくても知らなかった英単語や即興的には考えられなかった英語表現について再考する場を設定する。(実践Ⅰ)
 - イ Small Talk の1分間のフリートーク後に、パフォーマンステストに向けたポートフォリオを作成する時間を設定し、会話の流れを想定して、会話が継続するように表現を考えることができるようにする。(実践Ⅱ)

3 単元構想

(1) 実践 I Let's make Quiz of rules & manners in Japan Unit4 Homestay in the United States 令和5年度 中学校第2学年

活動	学習内容	主な手だて
つかむ 見通す (1時間)	① ALTのお願いを聞き、フィリピンのマナーやルールについてのクイズに答える。	・他校のALTから「日本のルールやマナーについて教えてほしい」というビデオレターを視聴し、ALTたちに教えたいという思いをもつ。 ・新出表現への気づきを促し、クイズ作りのイメージを膨らませるために、ALTからフィリピンのルールやマナーについての英語クイズを出題してもらう。
深める (5時間)	② have to(する必要があること)、don't have to(しなくてもよいこと)の用法について学習する ③ must(しなければならないこと)、mustn't(禁止されていること)の用法について学習する ④ 日本のマナーやルールに関するクイズを考える	・新出表現の定着を図るために、ペアで例文の音読や短文作り、Q&Aのアクティビティを設定する。 ・既習表現を活用して表現する力を高めるために、ペアやグループで意図的に話題を提示したり、場面を設定したりしたスモールトークを行う。 ・タブレット端末で自分が伝えたい日本のルールをクイズ形式にし、適切な英語表現を考える活動を設定する。
活かす (3時間)	⑤ ALTたちに日本のルールやマナーについてのクイズを出し、説明する	・言語活動の中で自分が伝えたくても知らなかった英単語や即興的には考えられなかった英語表現について再考する場を設定する。

(2) 実践 II Let's talk about your experience Unit1 Sports for Everyone 令和6年度 中学校第3学年

活動	学習内容	主な手だて
つかむ 見通す	① 自分の経験を英語で話すという課題をつかむ	・ALTと担任のモデルトーク後に、生徒たちが今までにどんな経験してきたか知りたいと伝えてもらう。
深める	② 現在完了形経験用法を学ぶ ③ 新出表現を用いて、自分の経験を英語で表現する	・新出表現を活用した会話モデルをペアで練習する。 ・Small Talkの1分間のフリートーク後に、パフォーマンステストに向けたポートフォリオを作成する時間を設定し、会話の流れに想定して、英会話を振り返ることができるようにする。
活かす	④ ALTと1分間、経験したことについて英会話する	・評価のポイントを事前に提示しておき、各観点について、自己評価振り返りができるようにする。

4 研究内容

(1) 仮説1に対する手だて1の検証

① 実践Iの仮説1に対する手だて(ア)ALTからの依頼について

西尾市で勤務するALTたちが日本に来てまだ日が浅いことから、日本のルールやマナーについて不思議に感じたことをビデオレターで伝えてもらった。生徒たちは、最初、本場の英語の発音を聞き取れず、内容を理解できない生徒もいたため、本校に勤務しているALTから話を簡潔に再度伝えてもらった(資料3)。生徒たちが日本のルールやマナーについてALTに紹介するという目的や状況を理解したところで、ALTから母国(フィリピン)のルールやマナーについてクイズを出題してもらった。写真を示すことで日本のルールとの違いを視覚的にも理解を促した(資料4)。生徒たちは日本とフィリピンとのルールで当たり前なことが違うことについて驚いていた。振り返りの中には、「日本では当たり前だけど、海外では違うか

資料3 ビデオレターの内容を確認するALTと話を聞く生徒



ら、日本での生活に困ってしまう。自分たちが英語で紹介して助け
てあげたい。」という思いと英語で伝える目的をつかむことができた。
最後に、担任から生徒たちに「どんなかたちで紹介してあげると
よいか。」と問いかけると、「クイズ形式にして、日本のルール
やマナーを紹介すると楽しく知ってもらえると思う。」と提案する
生徒が現れ、単元終末の言語活動をイメージすることができた。

資料4 テレビに提示した資料



以上のことから、実践Ⅰの仮説1に対する手だて(ア)は有効だ

ったといえる。ALT たちからの依頼に対して、英語で日本語のルールやマナーを紹介することの目的意識を持つことができた。また、ALT が母国のルールやマナーをクイズ形式で紹介したことで、単元終末の言語活動へのイメージをもつことができた。

② 実践Ⅱの仮説1に対する手だて(イ) ALT と担任のモデルトークについて

今年度、新しいALT が赴任したため、各学級で自己紹介してもらった。その後、現在完了形の経験用法を使用して担任とモデルトークをした。生徒たちは、現在完了形の意味を推測しながら聞くことができた。現在完了形の経験用法の文法を確認した後、ALT から”What have you ever experienced? I want to know about your experiences. If I can know about them, I’m happy.”と伝えてもらい、新しいALT と現在完了形の経験用法を用いて、英会話する目的が生まれた。生徒たちは自分たちのどんな経験を伝えようか考えをめぐらせた。そこで、担任から「1学期のパフォーマンステストも兼ねて、1分間、ジャスティン先生と英会話してみよう。」と提案し、Small Talk の時間を活用して、練習していくことを伝えた。これによって、生徒たちは1分間、ALT と会話を続けることと、新出表現を用いて、ALT と即興的に会話をする事への意識づけをすることができた。

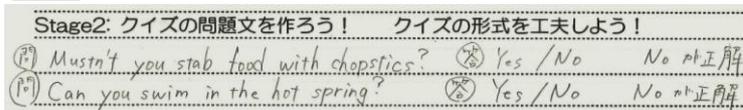
以上のことから、実践Ⅱの仮説1に対する手だて(イ)は有効だったといえる。新しいALT と互いによく知り合うためという目的意識と、新出表現を活用しながら1分間、英会話を継続させる必要性を生み出すことができた。

(2) 仮説2に対する手だて2の検証

① 実践Ⅰの仮説2に対する手だて(ア) タブレット端末の活用とクイズ作りの活動について

新出表現として学習した、have to/don’t have to と must/mustn’t を活用して、海外のルールやマナーと比較して、日本でのルールや

資料5 生徒が作成したクイズの英語表現の例(ワークシート)



マナーとして「～しなければならないこと/しなくてもよいこと/してはいけないこと」を英語で表現した。クイズの形式も生徒が工夫し、Yes-No 形式で問題を作成し、意図的に否定疑問文で表現したり(資料5)、答えの選択肢3択を英語で考えたりする生徒も現れた。しかし一方で、タブレット端末で調べたことを許可したことによって、インターネットでの翻訳を利用して、表現を自分で考えず、翻訳された英文を写してしまっている生徒もいた。

以上のことによって、実践Ⅰの仮説2に対する手だて(ア)はクイズ作りをする活動については、新出表現を工夫して活用することについて有効であったが、タブレット端末の使用方法については課題が残った。ルールやマナーについて検索するのはよいが、インターネット翻訳は使用しない、または使用する場合は、英単語を調べるのみで文で検索してはいけないことを確認するべきであった。

本番でどんな会話をするか見通しをもって記録したりするように指示した。生徒の中には、1回目の振り返りを活かして、次の Small Talk でどうやって会話を続けるか学習を調整する生徒もいた（資料8）。

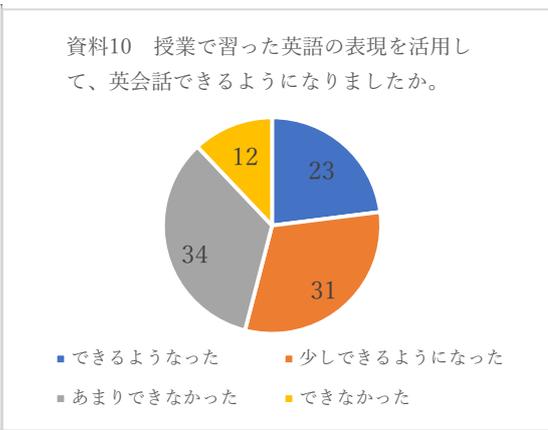
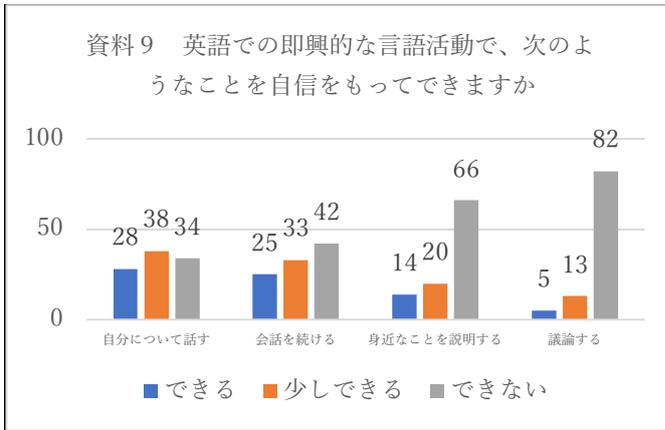
以上のことから、実践Ⅱの仮説3に対する手だて（イ）によって、言語活動での自らの学習を言語面・内容面で振り返り、次の言語活動に活かそうとする生徒の姿につながったことから、この手だては有効であったといえる。

資料8 生徒の Small の振り返り

振り返り あり物	B	Have you ever eaten cake? Yes, I have. What do you like better, cake or bread? I like cake better.
振り返り あり物	B	Have you ever eaten cake? Yes, I have. What do you like better, cake or bread? I like cake better.
振り返り あり物	B	Have you ever eaten cake? Yes, I have. What do you like better, cake or bread? I like cake better.
振り返り あり物	A	Have you ever eaten cake? Yes, I have. What do you like better, cake or bread? I like cake better.
振り返り あり物	A	Have you ever eaten cake? Yes, I have. What do you like better, cake or bread? I like cake better.

5 研究の成果と課題

本研究実践後に、筆者が担当する学級で再度、アンケートを実施した（資料9、10）。



(1) 成果

アンケート結果より、成果として以下の2点が挙げられる。

1点目は、即興的に会話を続けることに自信がついた生徒が増えたことである。

2点目は、授業で習った表現を活用して英会話をできるようになったと半数以上の生徒が実感できたことである。

この成果は手だてを踏まえ、生徒の言語活動の経験を充実させることができたからだと考える。

(2) 課題

実践やアンケートの結果から、課題として以下の2点が挙げられる。

1点目は、相手意識である。英語で話す目的意識は本実践の手だて1によって生み出すことはできたが、相手のバックグラウンドや会話の中で扱った情報について、相手が知っているかどうかなど、会話の中で相手がどんな反応を示すかなどについて想定して話す内容に見通しをもったり、表現を工夫したりすることを考えるところまで至らなかった。導入でのALTとの出会わせ方やインタビュー活動を通して、より相手の情報をつかめるようにしておくべきであった。

2点目は、即興的な会話の中で、既習表現を活用しきれない点である。手だて2、3によって、その単元で学習した新出表現や Small Talk でよく使用する表現は活用して会話をするようにはなったが、話題や会話の流れに沿って、何かを説明するために、既習表現の動名詞を主語にする表現や、自分の考えを述べ、議論するような表現についてはまだ即興的に活用できるようには至っていない。

今後は、次のステップとして、自分の考えを伝え合ったり、その理由を説明したりして英語で議論するような言語活動に取り組み、生徒たちの英語力のさらなる成長へとつなげていきたい。